



河北総合病院 新病院開院

杉並の地域医療の拠点としての使命を果たすために



社会医療法人河北医療財団
理事長 河北 博文

社会病理を専門に、「その人らしさ」に寄り添う医療を目指して

私は医師としては「病理学」が専門です。病理は病むことの原理を考え、最終診断をするものです。しかし、病院・医療の経営を担う責任者として、人間そのものの病理ではなく、「社会病理」を専門にしようと決めて取り組んできました。社会と人間の生き方をつなげて考え、社会の変化によって現れる病気や課題、その人らしく生きることに寄り添える医療のあり方を追求します。

河北総合病院は1928年、私の祖父が個人の民間病院として創設しました。当時の日本人の平均寿命は戦争を除いても

50代前半。感染症、特に結核が最大の死因でした。若い人や子どもも亡くなっていました。しかし、抗生物質の登場により結核は治療可能となり、感染症は治せるようになりました。

1945年の終戦以降、日本人の生活環境、食生活が大きく変わり、病気も変化して医療の役割も変わっていきました。父が理事長を務めた頃には平均寿命は60歳を超え、次第に生活習慣病や高齢化に伴う疾患への対応が重要になり、時代とともに病院の役割も変化していきました。

心の問題も医療の課題＝力と知識を集め・重ねて対応する力を

–そもそも、遥か昔、ヒトは野山を駆け回っていた頃は生きるために、糖や塩分を活かす仕組み、あるいは止血作用や免疫力などの体の力を獲得して生き抜いてきました。しかし現代では、生活環境や習慣、衛生面、特に食生活が大きく変わり、いまや糖尿病や高血圧、心筋梗塞や脳梗塞など、その仕組みが病気をもたらすようになっています。感染症は主要な死因から外れ、代わりに生活習慣病やがん、そして心の病が重要な課題になっています。SNSの普及や家族関係の希薄化が進み、孤独や

孤立もまた新たな社会病理です。医療は身体の病だけでなく、こうした心の問題にも応えていかねばなりません。

そのためには病院のそれぞれの医師が学び、身につけてきた知識や技術を活かすだけでなく、「集学的」で「重層的」な医療が必要です。特に高齢社会では「がん社会」でもあり、多くの人ががんと共に生きています。手術や放射線、抗がん剤による治療だけでなく、病と共存しながら天寿を全うできる、その人らしい最終章を支える医療であることが重要です。

いよいよ7月から河北総合病院の新病院での診療がスタート。救急やがん診療などの医療の充実、分散していた施設の統合で、機能、利便性が格段にアップする。さらにはこの地にふさわしい緑と住環境を尊重した佇まいにも想いを寄せて建てられている。連載の締めくくりのインタビューは、河北医療財団を率いる河北博文理事長。民間病院が医療という公的な使命を果たすために、長年にわたって「社会を診る」医師であり経営者である姿を貫いてきた人物である。その言葉からは、氏が幼い頃から見てきた古い病院が、長い年月を経て生まれ変わっていくことへの感慨よりも、これからの地域医療への想いの強さが勝っていると感じられた。

（中田）

杉並で地域内完結を目指し拠点整備に注力

私は1983年に副理事長となり、病院の経営に携わることになりました。私が子どもの頃に出来た建物がまだ残っていますが、総合病院の建て替えは当時から考えていました。しかし、バブル崩壊後の当時、病院を建てられるようなまとまった用地の手当てが杉並区内では出来ませんでした。そこで、総合病院の機能だけにとらわれず、健診センターや退院後に必要なリハビリ、すぐには家に戻れない高齢者のための老人保健施設、慢性的な治療が必要な透析センターなどを順次整えてき

ました。さらには在宅医療、家庭医として総合診療ができる医師たちが地域を支えるファミリークリニックがあります。新たに機能を備えた総合病院を中心に、杉並で地域内完結ができる医療を提供することが河北総合病院の使命です。

近年は多摩地域の在宅医療を展開するグループとも協働していますが、これからは杉並でもさらに在宅医療や家庭医療の体制づくりが必要です。地味ですが、生活に寄り添える医療の柱であり、まだまだ不足していると考えています。

民間病院が公的（パブリック）な医療を担う

私たちのような民間の病院は、「私（プライベートセクター）」の立場ですが、医療というパブリックな（公に貢献する）使命を担っています。そのためには、医療者はもちろんのこと、地域の人たちとも理念を共有し、確認し続けることが大切です。

私は1980年代初めにアメリカで見てきた医療を評価する社会的活動を日本で

も取り入れるべく、「日本医療機能評価機構」の立ち上げに関わり、日本の医療の質を客観的に評価する仕組みづくりに取り組んできました。「良い病院」とは何かを論理的にまとめたいと思ってきました。

そうした論理的な裏付けとともに、日々職員と理念を確認し続け、地域に信頼される「良い病院」であり続ける努力を重ねていきます。

これまで紙面を通じてお伝えしてきた河北総合病院からのメッセージ、インタビューの連載記事から抜粋してご紹介します

3本の柱で病院の機能をさらに強化

3本の柱を中心に病院の機能強化を図ります。

- ①がん治療の強化：放射線治療を開始し、化学療法、手術、病理診断など、「がん診療センター」が統括する包括的ながん治療を当院内で行うことができる体制
- ②ロボット手術の導入：術中の出血量が少ない、傷口が小さい、機能温存の向上や合併症のリスク軽減などを見込める、といった患者さんへのメリットが大きいのが特徴
- ③救急体制の強化：救急車の受け入れがしやすくなり、今まで以上に急を要する患者さんの疾患状態に対応することが可能になります。

当院のスタッフ一同が心掛けていること

疾患状態の全体をみる総合診療科と専門性の高い各診療科の両輪で患者さんの治療に力を入れて取り組みます。快適な環境、空間というハード面に加えて、正しい知識と経験を兼ね備えた医療スタッフの充実、患者さんにとって心地よいホスピタリティを提供することで、地域の皆様の健康と医療に貢献します。



院長／整形外科主任部長 鎌田 孝一

「心臓・血管」の疾患への対応力、循環器救急にも注力

24時間365日いつでも緊急力ターテル治療ができる体制で、夜間も必ず循環器内科の常勤医が当直をしているため、急患に対して速やかな対応ができます。



副院長／心臓・血管疾患センター長／循環器内科主任部長 水村 泰祐

「二人主治医制」で皆様の日常と緊急時の治療をサポートします

救急外来では、より多くの患者さんを受け入れる体制を整えました。検査や治療がより迅速に行えるようになります。



救急集中治療科
部長 内野 正人

これからの地域医療を支えるための急性期医療の先の連携

救急・急性期病院は、患者さんを受け入れ、初期治療を行い、診断し、治療方針を決定する役割を担います。その後の療養やリハビリを必要とする患者さんを、適切な病院や診療所、施設へつなぐことで、新たな患者さんを受け入れることが可能になります。必要な人に必要な医療を適切に提供し続けるためには、急性期の「先」の連携が欠かせません。当院では、職員が日々医療機関と密に連絡を取り合いながら、患者さんにとって最適な連携を構築できるよう努めています。



副院長／入退院・地域情報センター長 河北 光

「からだに優しい」放射線療法で「治るがん」がたくさんあります

がん治療の3本柱として、①外科療法（手術）、②薬物療法（抗がん剤などの薬を用いた治療）、③放射線療法があります。

新病院で開始される放射線療法は、がんの種類によって手術と並んでがんを完全に治せる治療方法です。身体的な負担が少なく、治療効果を期待することができます。



放射線腫瘍科
部長 唐澤 久美子

手術室が増え、対応力も強化

手術室が増設されることは、整形外科にとっても体制強化につながります。当院では、杉並区だけでなく、中野区や世田谷区、練馬区といった周辺地域から外傷の患者さんを受け入れる機会も多く、整形外科だけで年1,200件を超える手術を行っています。



整形外科部長
兼手術部長 湯淺 崇仁

地域包括ケアシステムの構築

急性期病院を中心に地域の健康と生活を支える

「健康生活支援統括センター」は、河北医療財団の中でも「河北透析クリニック」「介護老人保健施設シーダウォーク」「河北ファミリークリニック南阿佐谷」「河北健診クリニック」を統括し、さらに地域のクリニックや病院、施設と連携しながら、「地域包括ケアシステム」の推進を担っています。

患者さんが地域で家庭医や主治医を持ち、継続的なケアを受けられる体制が整いつつあります。地域全体で健康と生活を守る医療体制を築いてまいります。



健康生活支援統括センター長／院長補佐／腎・リウマチ膠原病・血液センター長／腎臓内科主任部長／入退院・地域情報センター部長 岡井 隆広

病院らしさを抑え森の中に癒されに行くような空間へZEB認証を都内民間病院で初取得

都心にありながらも「森の中の病院」というコンセプトのもと、自然と調和した環境を大切にしました。大きな木は切らずに移植し、新たに武蔵野の樹種を選んで植樹もしており、高い緑化率を実現。2階の外来メインフロアは森の雰囲気をも感じられるところで、「ホスピタルコリドー」（回廊）として開放的でゆったりとしたスペースで過ごしていただくことができます。

環境への配慮として、国が進めているZEB Oriented（ゼブ）（Net Zero Energy Building＝ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）の認証を取得。快適な室内環境を維持しながら、年間の一次エネルギー消費量の収支をゼロにすることを目指した建物に与えられる認証です。急性期病院では都内初、全国でも3例目となり、都内では最もエネルギー消費が少ない病院となります。



清水建設（株）設計本部／医療福祉施設設計部副部長 大石 茂